

## 書きかけの夏

17日水曜日に、応援団、吹奏楽部、2, 3年生が、集められるだけ集めてもらったバス10台に分乗して八橋球場に集結した。甲子園予選の対角館戦の応援のためである。投手力、打力ともに評価の高い角館戦は八橋ブロックの大きな関門であり、毎試合応援してくれている保護者会の皆さんや、スタンドで試合を分析している副部長の顔にも、大一番に向けての緊張感があつた。

エースの佐々木亮君は上々の立ち上がりで、2回のピンチには2年生捕手の大友君の牽制でセカンドランナーを刺し、相手の先制のチャンスをつぶした。その裏にヒットで出た佐々木翔君を、佐々木章仁君の目の覚めるような3塁打で迎え入れて、1点を先取した。その後、両エースの投げ合いとなり、5回に相手に1点を奪われ、6回に追加点を許した。7回から登板した畠山投手はピンチの芽を摘む好投を見せ、9回裏、1番からの好打順で、とにかく1点を奪って追いついてほしいという祈るような声援と応援の中、しかし、先頭打者はレフトフライに倒れた。続く深谷君が執念でライト前にはじき返して望みをつないだものの、続く打者が三振、最後の打者 四番佐々木翔君が渾身の力で打ち返したボールが遊撃手のグラブに収まった瞬間に、悲鳴のような声がスタンドに起き、懸命に応援していた顔が涙でくしゃくしゃになった。肩を支えられながら引き上げる選手の頬にも涙が伝う。全力で戦いきった試合は無失策で、引き締まった内容だった。だからこそもっと長く諸君が闘う姿を見ていたかった。あまりに早い幕切れだった。誰もがそう感じただろう。



(写真提供 由利写真館)

こんな風に試合を総括すれば、ほんの数行で記述されもするが、しかし、この試合に辿り着くまでの一人一人の取り組みは数百ページの厚さの本にもなろう。その本のどのページをめくっても、野球への直向きな思いがほとぼしり出る。いくつもの試合で流した涙と、その涙を笑顔に変えるために費やした努力。いくつもの壁にぶつかり、悩み抜いて乗り越えた。成果が出ずにうちひしがれて、焦燥感にさいなまれもした。人一倍苦しい練習を積み重ね、体はへとへとになりながらも右文尚武に取り組んだ。

上体を反らして何度も必勝歌を歌い、球場にこだました本校生徒の応援は、一人一人の直向きさを分かち合い、一緒になって闘おうという共戦の歌だ。野球部の選手諸君が見せてくれたチャレンジャーとしての姿を、本高生は忘れない。諸君はあの試合会場だけではなく、本高生としてもチャレンジャーであろうとした。諸君が投げしてくれたボールを、きっと野球部の後輩はもちろん、本高生一人一人がしっかりと受け取った。それが、本高の新しい歴史となる。

野球部の諸君よ。本高生よ。諸君が書き進めていた本はまだ、書きかけだ。今年の夏の甲子園は終わったが、執筆はまだ終わらない。一人一人の物語が、見事に完結するように、鉛筆を握り直して書き進めることだ。